MELLME ROMANCE

メルメ・ロマンス

ファースト・ラブ・メモリー

田波靖男

ファースト・ラブ・メモリー
昭和60年9月18日　初版発行
著者　田波靖男
発行者　増田義和
発行所　実業之日本社
本社　東京都中央区銀座一―三―九
TEL　〇三(五三五)二三〇一(編集)
〇三(五三五)四四四一(販売)
振替東京一―三二六　〒一〇四
支局　大阪市北区曽根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
TEL　〇六(三一二)一五七三
印刷所　㈱廣済堂　製本所　共文堂
乱丁、落丁の場合はお取り替えします
ISBN4－408－39319－3
©Yasuo Tanami 1985
Printed in Japan

MELLME ROMANCE

メルメ・ロマンス

ファースト・ラブ・メモリー

田波靖男

本文イラスト・おくの剛

目次

夏の出会い……5
トワイライト・キス……14
蒼いフォトグラフ……31
二人だけの旅……41
早過ぎるさよなら……65
ニューヨーク発最終便……75
それぞれの秋……82
潮風のささやき……87
ターニング・ポイント……96
ハワイアン・サンセット……107
波と風の神話……141
愛のビッグ・ウェーブ……164

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

1 夏の出会い

I.

美香が淳一に会ったのは、五十九丁目のコロンバス・サークルだった。

セントラル・パークに近いサークル（円形広場）には、『森のテラス』というカフェ・レストランがある。

彼はそこで遅いブランチを食べていたにちがいない。それともコーヒーのカップを前に通りをながめていたのだろうか。

あのとき、広場に海から潮風が吹いていた、と美香は彼に言ったことがある。

たしかにニューヨークは海のそばにあるけれど、あんな大都会では排気ガスと潮風の見分けなんてつかない、と彼は笑ったが、きらめく深いブルーの海から生まれた風を美香はたしかに覚えている。

初めて会ったとき、彼が愛した果てしなくうねる波、そして大海の鼓動の気配を感じたのは

とても不思議なことだった。

Ⅱ

その夏、美香はニューヨーク音楽大学のサマースクールに通っていた。

――今、この街にいるなんて夢みたい……

美香はコロンバス・サークルに向かうペイブメントに落葉を見つけて、過ぎていく夏を惜しんだ。

つたにおおわれた古いブラウンストーンの大学で、美香は日系四世のリサと作曲の授業をうけてきたところだった。

「バイトがあるといいんだけど」

「大学のカウンセラーに申し込んだら、半年は待たされるわ」

リサは長い髪をバンダナで結びなおした。ピアノ課の二年生の彼女は、作曲もできるジャズ・ピアニストをめざしている。

「バイトをしたいって学生が四百人も登録しているんだから。この前、わたしが行ったときは四百八番目だったわ」

「あなたは本当の学生だから……」

美香はため息をついた。

夏のバカンスの間だけ開かれるサマースクールには、市民や外国人も申し込めば誰でも参加

できる。それが終われば、美香は日本に帰らなければならない。

——ここの大学で新学期が始まるころは、東京で受験勉強だわ……

美香は今年、日本で普通の大学の入試を受け、ごくふつうの学生らしく不合格だった。父は落胆を隠しきれずに、がっかりするんじゃないとなぐさめてくれたが、母はそれこそ一家心中しかねない嘆きようだった。

また大学に落ちたら、さらに悲惨な状況になることは目に見えている。

——このままニューヨークで、作曲の勉強を続けられたら……

美香はサマースクールでモダン・ミュージックのコースを選び、わずかな間にメロディを創りだす魅力にとりつかれた。

——でも留学など夢のまた夢だわ。

ニューヨークに来ただけでも信じられないくらいラッキーだ。せめてビッグ・アップル（ニューヨークの愛称）をしっかり見物していこうと、美香はプランを立てている。

五番街とソーホーはウィンドウ・ショッピングだけにして、オーチャード・ストリートで買物をする。

カナル・ストリートもなかなかで日曜のガラクタ市には素敵なほりだし物があるかもしれない。

「値切りたおして、おみやげにするといいよ」

リサはアドバイスした。

「お店をのぞけば、欲しいものばっかり」
街角のギフト・ショップのウィンドウをながめて、美香はため息をついた。
「子供にピアノでも教えるバイトはないかしら……」
「あったら、わたしがやってるわ」
リサが美香をつついた。
「彼氏のお出むかえよ」
美香は立ちどまった。
コロンバス・サークルに白いトランザムが停まっている。スポーツ・タイプのやたら目立つ車のそばで、石川明彦がタバコをふかしていた。
「アイビーの決定版ね」
リサは明彦を観察して、洋服だけはね、とつけ加えた。
昨日もそのまえの日も、明彦の服装はアイビー・ファッションのカタログのように目まぐるしく変わる。
変わらないのは、美香がホームステイしているリサ原田の家へ帰る道すじに決って車をとめて待っていることだった。
「パパのオフィスの前で会って以来、毎日だものね」
リサは感心したように首を振った。
「雨が降ってたのがまずかったわ」

美香とリサはバス・ストップまで走ろうとした。
その時、バカンスでニューヨークにきていた明彦に声をかけられ、雨の中でバスを待つよりはと、彼の白いトランザムで原田家まで送ってもらったのが運のつきだった。
「一度くらいつきあってあげたら？」
リサがささやいた。
「リッチマンだし、一応、ハーバードの学生よ」
「タイプじゃないの」
美香ははっきり言った。
「彼、よく見るとマイケル・ジャクソンに似てるじゃない」
「どこが？」
「色の黒いとこ」
「冗談はやめて。わたしは真面目な浪人なんだから」
ローニンて何、とリサが聞いている間に、明彦は美香を見つけ、足早に広場を横ぎって近づいてきた。
「ちょっとつきあって」
美香はリサの腕をつかむと、カフェ・レストランの『森のテラス』にむかった。
女同士で腕を組むと、レスビアンとまちがえられるからやめて、とリサに注意されたことがあったが、この際そんなことを気にしている場合ではない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

「ハーイ、きみたち」
明彦はあくまでも明るく手をふって、『森のテラス』のドアを美香のためにサッと開けた。
「コーヒーでもどう？」
「リサと大事な話があるの」
「話が終わったら、ドライブなんて気分転換にいいんじゃないかな」
美香がことわるとは、明彦は夢にも思っていないようだった。
「そうだ、ロングアイランドに行きましょう」
この調子で、明彦は有名な高級レストランやディスコ、ナイトクラブまでニューヨークのありとあらゆる名所をあげて、一緒に行こうと美香を一時間半ほど誘いつづけたことがある。
どんなに断ってもめげない性格で、明彦がニューヨークに来て以来、この街にいる日本人の女子留学生を、残らずデイトに誘ったという噂は本当かもしれない。
「悪いけど、今日は約束があるから」
美香は口ごもった。明彦はすでに美香の腕をとって、テーブルに案内した。
——またねばる気かしら。
——困ったもんだ。
美香とリサは目を見かわした。
そのとき、青年が窓ぎわのテーブルから立ちあがった。
ガラス張りの窓から陽射しがいっぱいにさしこみ、まぶしい逆光の中から、彼は美香に近

づいてきた。
「やあ、おそかったね」
美香はあっけにとられて彼を見つめた。
彼は白いTシャツにリーバイスをはいて、とても背が高い。
あさ黒く陽にやけているのは、きっとスポーツマンだからだろう。ナップ・ザックを下げて、肩幅の広さが印象に残る青年だった。
「行こう」
青年はいきなり美香の腕をとると、戸口に向かおうとした。
「なにをするの？」
美香はびっくりして身を固くした。
「なにをするのもないだろう。さんざん待たせたくせに……」
青年は強引に美香を引っぱって表に出た。
「石川さん、なんとかしてよ」
うしろでリサの叫ぶ声がきこえた。
「よしてよ！」
外に出たところで美香は身体をよじって、彼の手をふりほどこうとした。
「あいつをまいたら放してやるよ。しつこくされて困っていたんだろう」
青年は今出て来たばかりの戸口をふり返った。

そのドアが中から開いて明彦が追って来た。
「おい、きみ、その人をどうするんだ」
明彦が気色(けしき)ばんでつめよろうとした。
美香はとっさに青年の前に出た。
「この人よ。わたしが約束があると言ったのは……。行きましょう」
美香は戸口のところから、こわごわのぞいているリサに手をふると、今度は自分から青年の腕をとって歩き出した。
「美香さん……」
明彦はあっけにとられた表情で見送っていた。
午後のペイブメントにはさわやかな風が吹きぬけていた。夏の終わりの風の中を、彼によりそって美香は歩いて行った。

Ⅲ.

「広場をながめていたんだ」
彼は街角を曲がると、美香から腕をはなした。
「そうしたらきみが通りかかって、急にUターンして店に入って来るのが見えた」
「石川さんをやりすごそうとして、失敗したの」
二人のそばにセントラル・パークが広がっていた。木立が風にざわめき、公園の南端に接す

る街路セントラル・パーク・サウスのペイブメントに揺れる模様を描いている。
——この風は、空よりもっと蒼い海から生まれて、大都会を通りぬけていくのではないかしら……
美香はブルーに澄みきった空を見上げた。
「じゃ」
彼はそのまま歩き去ろうとした。午後の陽射しに彼の影がのびて、背がますます高く見える。
「あの……」
美香の声に彼は振り返った。
「まだ、お礼をいってなかったから」
「いいさ」
彼はアメリカ人風に、ちょっと肩をすくめた。
「ネバー・マインド」
「待って」
今度は何だ、という顔つきで彼は振り返った。
「まだ、あなたの名前を聞いてないわ」
美香がほほえみかけると、彼もつりこまれて微笑を浮かべた。

2 トワイライト・キス

I.

「ニューヨークに着いたばかりなんだ」

彼は浅野淳一、と名乗った。美香はセントラル・パークを淳一と散歩した。

高層ビルのそびえたつニューヨークの真中に、魔法の森のように広々とした公園がひらけている。散歩道がなだらかな芝生の間をぬってつづき、木立の陰に小さい湖が見えている。

緑の樹々を映した水面は陽光を反射し、さざ波が陽気にきらめいていた。

「きみは学生かい？」

「一応。夏の間だけ」

美香はサマースクールに通っていると答えた。

「あなたはどこから来たの？」

「ロスから」

「ニューヨークにはどうして？」
「友だちの会社を手伝うんだ」
どんな会社、と聞きかけて、美香は口をつぐんだ。会ったばかりの相手に根ほり葉ほり質問する聞きたがりやではなかったはずなのに、つい彼のことを知りたくなる。
「この公園のむこうの端にダコタ・アパートがあるわ」
美香は大きな木々の彼方に目をむけた。
公園の北にはストロベリー・フィールズと呼ばれる一角があり、散歩の名所になっている。そばに高級マンション街があって、ダコタ・アパートはその一つだった。
「ジョン・レノンが射たれたとこか」
「ビートルズ、好き？」
「別に」
ジャズもクラシックも日本のニューミュジックにも淳一は興味がないようだった。
「じゃあ、何が好きなの？」
「ないね」
「音楽じゃなくて、別のことよ」
「だからないんだ」
淳一はそっけなく言った。
彼の言いかたが美香の気にかかった。まるで誰かに質問されたときのためにあらかじめ答え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo